巻　頭　言

家庭菜園で思うこと

公益財団法人日本植物調節剤研究協会　評議員
協友アグリ株式会社　執行役員開発部長
氏家　敬

かれこれ10年ほど，家の近所の貸農園で十数坪の土地を借り，野菜作りをやっている。季節に応じいろいろな野菜を少しずつ育て，収穫を楽しんでいるが，耕起から植付け，各種栽培管理，防除等すべて手作業でやっており，大昔の農業を追体験しているような感覚である（家庭菜園なら当たり前か)。冬は寒風に震えつつ，夏は滴り落ちるほどの大汗をかきつつ作業をしていると，わざわざ休日を使ってなんでこんな苦労をしているのかと思うこともあるが，それでも続けているのは，やはりものを育てる過程の楽しさであり，手をかけたものが立派に育ち収穫できた時の達成感であり，何より収穫物を新鮮なうちに賞味できる幸福感（優越感？）である。特に枝豆とスイートコーンはとれたての味が格別で，さらに茄でるよりもスイートコーンならラップしてレンチン，枝豆なら焼くか蒸すと極上である。

また，農薬業界にいる自分にとっては，農薬を使う対象の作物がどういう育ち方をし，どういう防除が必要なのか等，その作物の栽培上の特性を実体験で学べることは大きなメリットと感じている。初めて落花生を育て，土の中から実が出てきたときは感動したし（殻の中からハサミムシが出て来た時はムカついたが)，菜園にハスモンヨトウが多いなと思っていたら，その後県の農業試験場から注意報が出て「やはりそうか」と思ったりもした。

さらに今年は家庭菜園のメリットがもう一つ増えた。新型コロナの影響で“おうち時間”が増加した中でのストレス解消である。菜園では3密の「さ」の字もなく，自粛自粛の中でもそれまでと変わりなく菜園に通い作業をしている。このコロナ禍で同様に考えた人が多かったようで，野菜苗や家庭菜園の本がよく売れ，貸農園の新規契約者も急増とのことである。

さて，おこがましい話ではあるが，家庭菜園をやりつつ思う日本の農業のことを少し述べたく思う。

これまでの経験で最も感じることは，一定品質の作物をつくるということは何かと手間がかかるということである。手作業であり，プロ農家の技術・ノウハウは持ち合わせていないので当たり前のことではあるが，あれこれ作業をしているうちに農薬屋として肝心の防除が疎かになって，草茫々，病害虫で葉がボロボロなんてこともままある。実際の農業場面では，各種栽培技術，農業機械，農薬はじめ各種農業資材等の進歩により農業生産の効率性は昔から見れば格段に上がってはいるが，農家の高齢化，農地の集約化，大規模化，農産物の業務用途や海外輸出への対応等いくつかのキーワードから考えれば，これからさらに効率的な生産を目的とした技術開発が必要なことは自明のことと思う。スマート農業が提唱され，種々の取り組みがなされつつあるが，経済性を含めて実装がなされるよう望むところであり，農薬屋としてもより効率的な防除ができる薬剤なり施用技術を開発していかねばならないと感じる。最近は施用技術としてドローン散布が注目されているが，その有効性を場面ごとにしっかり確認しつつ展開を考え，また，その他にも簡便で圃場規模に依らない施用方法の検討も進めていくべきであろう。

もう一つ菜園で気になることとして，昨今の天候不良がある。我が菜園では，昨年は大型台風で作物が倒れ，今年は長梅雨でキュウリが枯れ上がった。温暖化が叫ばれて久しいが，集中豪雨，大型台風，異常高温等農業に不適な気象現象は当たり前になっており，今後もそうなのであろう。温暖化で外来の雑草や害虫が分布拡大し，農業に悪影響を及ぼすことも懸念されている（最近，水田雑草として話題の特定外来生物ナガエツルノゲイトウを見てきたが，これも原産地は南米と聞く)。

このような気候変化への対応技術も重要であり，農業生産の各場面で中長期的対策がとられていく必要があろう。先般，農研機構の研究成果をまとめた「地球温暖化と日本の農業」が刊行され，私も購入して読み進めている。何かいいアイディアでも出て来ないものかと菜園でピーマンを収穫しながら思っているところである。